2024年9月の総評に代えて　　高橋修宏

輸送機の腹開き魚卵ほどに兵　　**長谷川柊香（宮城県）**

「魚卵ほどに兵」のレトリックが鮮烈。もしや「兵」たちは、成魚となるまでに大半の「魚卵」が死滅してしまうように、その多くが死んでいくのではないか。

処暑処女懐胎のつわりを思ったり　　**吉冨　快斗（埼玉県）**

「処暑」とは二十四節季の一つ、暑さが止み新涼が間近となる時季。この句では、「処」の重なりが不思議な感触をもたらす。「つわり」という具体性がポイントか。

村人２みたいな日々の鰯雲　　**杢いう子（佐賀県）**

「村人２」とは、どこか舞台脚本にあるような表現。そんなありふれた日々の風景には、やはり「鰯雲」が似合うのかもしれない。

書くことは火を渡すこと心には
わたしのための蝋燭がある　　**羽水繭（大阪府）**

「書くこと」をめぐる自己表白的な叙情か。「火を渡す」から「蝋燭」に至るまでの一貫したレトリックが、読み手に力強い印象をもたらす。

滅ぶとき、
たぶんあなたは光るだろう
そういう魔法が好きだったから　　**雲理そら（大阪府）**

一行目の「滅ぶとき、」から二行目の意表をつく推測、さらに三行目の大胆な飛躍がチャーミングだ。いったい、「あなた」は誰なのだろう。

君が水浴びをしてできた海には
プランクトンが
一匹もいない　　枝野　はと（愛知県）

冒頭に「君」と呼びかけられている相手は、誰なのだろうか。「プランクトンが／一匹もいない」という表現からは、清浄というよりも、どこか不穏な存在が暗示されているのではないか。

Ice Candy
エラーみたいな賞味期限　　金光　舞（埼玉県）

なにより、「Ice Candy」に表示された「賞味期限」にかすかな意外性がある。なるほど、それは「エラー」みたいだ。

ひろびろと夕方の平日のカフェで
机を暮らすように散らかして　　髙田皓輔（千葉県）

日常的な景色でありながら、このように記されると不思議な手ざわりが立ち上がる。勉強でもしているのか、仕事の延長なのか。たしかに、「机を暮らすように散らかして」カフェを利用している人たちが、最近ふえているようだ。

その秋の風鈴売りのつくり歌　　宮﨑　莉々香（神奈川県）

「風鈴」と言えば夏の季語だが、ここでは「秋」――。「つくり歌」というフレーズが、そんな季節はずれの「風鈴売り」には、ふさわしい。

葉脈のなかでゆっくり目をさます　　牛田　悠貴（東京都）

「目をさます」のは、いったい誰なのだろう。「葉脈」というイメージによって、あえかなポエジーが立ち上がるような気配。

地図には在る店なんだけど
月光　　絵巻（東京都）

かつて、そんな経験をしたことがある。「地図」には記されているのに、その「店」が見つからない。すでに閉店したのか、休業中なのか、あるいは「月光」によるあやかしだったのか。

ジャズの中に隠れた林檎　　波野　梅雨（東京都）

シンプルな修辞でありながら、「林檎」の一語が、さまざまな想像を呼びだす引き金となるようだ。